



拝殿の屋根の装飾部分を、
のみで仕上げる宮沢さん

大工の伝統技術伝えたい

信州伝統大工1級・佐久の宮沢さん

佐久市田口の大工宮沢隆さん(58)が、近くの御幸神社の屋根を半世紀ぶりに造り直した。県知事が認定する「信州伝統大工」の1級を2010年に取得してから初めて伝統建築の仕事に請け負った。「若い人が伝統技術を身に付ける意欲につながればうれしい」と話す。

伊勢湾台風による倒木で壊れた1959(昭和34)年が最後。風雨で木材が腐り、老朽化が進んだことから、木造平屋の本殿と拝殿計約60平方メートルの屋根を全面的に直すことになった。

宮沢さんら3人は瓦以外の木組みの部分を担当。下から眺めるときに建物が壮大に見えるよう、屋根を緩やかに反らしたり、

御幸神社を半世紀ぶり改修

破風板(合掌型の屋根を装飾する板)を地面に向けてわずかに傾けた。「見えないところに技術が詰まっている」と宮沢さん。破風板の下の装飾も再現した。

建築・建設業者らでつくる県建設労働組合連合会(松本市)は伝統的な建築技術を継承しようと2009年、「信州職人学校」を真松本技術専門校に開校し、伝統大工コースを設置。伝統大工の資格試験は4年間で延べ66人が受験し、1級に10人、2級に9人が合格した。

宮沢さんは初年度から受講し、計24回にわたり、木材や構造力学などの座学、道具作りや施工などの実技をこなした。「(それまでの伝統的技法を用いる施工は)自己流でやっているたので、とても勉強になった」と振り返る。

一方、建築基準法では、鉄製のくきなどを使わない伝統工法の場合、建築確認申請に手間が掛かるため「金物(金属製の部材を使った方が圧倒的に有利)」と宮沢さん。「伝統的な技術が正しく評価され、仕事に生きるようになってほしい」と願った。